『元代北方金石碑刻集成・京津巻』についての札記

森田　憲司

はじめに

かねて中国の知人から編集作業が進展していると聞いていた、『元代北方金石碑刻集成』（中華書局）の刊行がはじまった。2014 年の夏現在で筆者が目にしたのは２点で、最初に刊行されたのが、「内蒙古･東北巻（蒙古源流館所蔵資料）」で、次いで、今回取り上げる「京津巻」が出た。いずれも上下２冊からなる。先に前者について取りあげるべきなのであろうが、この巻は、鄂爾多斯市伊金霍旗にある「鄂爾多斯蒙古源流博物館」が「収集」した元代石刻資料を集中的に紹介したもので、その多くは、山東省西部、具体的には、嘉祥、金郷、魚台、鉅野といった地域のものである。どうしてここに、遠隔の地の碑刻が集まってきたのだろうか。また、その形状は、碑とされる形式であり、円首で、下部に「ほぞ」と思われるものが残っていることが多いが、碑座の残るものは少ない。大きさも２ｍないしそれを越えるものも少なくない。さらに、立石関係者名をふくむ、碑文の対象や内容には、従来知られている石刻とは異なる点が多いことなど、特異な点がある。解題における、基礎的なミスの存在を含め、その整理、検討には、かなりの時間を要するので、別稿でこれ自体をテーマとして述べることにし、ここでは、その対象地域が筆者がずっと関心を有している北京である、第２巻「京津巻」（楊玲主編　中華書局　2023）について紹介をし、気になったいくつかの点を述べておきたいと思う。

筆者は元代の石刻のうちでも北京のそれについての関心を強く有し（北京という都市、とくにその内部への関心を有し、それが同じく関心を有していた元代石刻と結びついたというべきか）、いくつかの文章を書いている。なお、元代の「北京」と言えば、すなわち国都大都ということになりそうであるが、この

巻は「京津」すなわち北京と天津という２つの特別市をタイトルとして有していることからもわかるように、現在の行政区画にもとづいて、対象地域が決められている。もっとも、比較的歴史の新しい天津には元時代の石刻は少なく、本書の内容の大部分は北京特別市の境域で発現、あるいは従前から存在していた石刻で、張国旺の前言（2023 年５月）には、北京 152 件、天津４件とある。なお、前言を書いた張国旺には、北京天津地区の元朝石刻の現況を述べた、「京津地区元代碑刻略論」(『隋唐遼宋金元史論叢』10　2020）という論文があるので、本書とあわせて参照されたい。くりかえすが、本書の言う「北京」は、あくまでも現在の北京特別市の領域であり、1960 年代まで城壁の残されていた明清北京城、それは元の大都城と大きく重なるが、の外となる部分（例えば門頭溝区など）のものを大きく含む。しかし、筆者の関心の対象となる石刻は、北京城とその隣接区域のものが中心となる。

元という時代は、公私ともに多くの石刻が立てられた時代であるにもかかわらず、北京城内には元朝の石刻の残存が少ないことは昔から論じられてきた。例えば、松田孝一に「北京の元代石刻 ～その残り方～」(『13、14 世紀東アジア史料通信』1 号　2004) があるので、参照されたい。したがって、元の大都に立った石刻の資料が新たに紹介されることには、意義がある。

なお、以下では、用字については、原則として常用漢字で統一し、中国文引用の際の句読点も日本式とした。また、「本書」と呼ぶのは、この巻であり、個々の石刻の前に附した数字は本書中での石刻番号である。

さて、最初に、この『元代北方金石碑刻集成』というシリーズについて、総主編である李治安・王暁欣の名前で出されている、「総序」(2022 年７月８日付）を材料に紹介し、その昨今の石刻研究の展開の中での位置づけについて、筆者の見方を述べておきたい。

まず、このシリーズが対象とする「北方」とは、現在の行政区画で、北京、天津、河北、山東、山西、河南、陝西、甘粛、寧夏、内蒙古、黒竜江、吉林、遼寧の各省、自治区、特別市であり、元朝の歴史で言えば旧と金朝に属していた地域とほぼ重なる。この大冊の目標は、これらの各地に現存する元朝金石について、再度原石を、もし無理なら拓本を調査して、拓影、録文、解題を集成・

出版しようというもので、全８巻、25 冊にまとめられる予定だという。

清代から民国にかけて、地方志の金石部分を含めて数多くの「石刻書」が編まれ、近年には、その多くは『石刻史料新編』（新文豊出版、1977 －）全４編に影印され、研究者の中国各時代の石刻の利用への道を開き、その後の中国での多数の石刻資料の紹介、図版の刊行とも相まって、日本の学界では、「石刻ブーム」とまで言われたこともあった。

ただし、石刻書が編まれた当時は、木版印刷の時代であり（後半には石印という手段も出現したが）、そこでは、石刻は編者などがそれを文字化した、「録文」という形で紹介された。残念なことには、その原石の多くは失われ、拓本影印の手段が発達した今日には伝わっていないため、我々は石刻オリジナルの姿を見ることはできず、他者の手を経由した「録文」しか研究の材料とすることはできない。このことは石刻研究にとって惜しむべきことである。一方で、その後に発現した石刻も多いし、もちろん、原石や拓本が生きながらえたものもないわけではない。

石刻研究は、原石か少なくとも拓本・拓影（拓本を図版化したもの、実際には原石の写真図版もふくむ）に拠らなければならないと考える森田は、知りうる限りの元代石刻の拓影について、その目録を作成して公開している（奈良大図書館リポジトリ、コロナの影響で閲覧が難しくなった機関も多く、個人作業は継続しているが、最近は公開の更新は中断）。また、近年になって、森田の目録外の未知の石刻が、江西省を中心に多量に紹介されていることについては、本稿の成稿とほぼ日を同じくして開催された、「第５回元朝史研究会」で述べた。もちろん、現在も進行する開発に伴って破壊されていく石刻は少なくなく、それが本書編纂の動機の１つであることについては、「総序」に書かれている。上述の江西省の場合は冷害による再開発が発見の原因の１つらしい。

こうした状況の中で、可能な限りの石刻を網羅して、拓影、録文、解題を掲載した本書の出現の意義は大きく、少なからず期待していた。いつも言うことだが、石刻には大きなものが少なくなく、拓本実物の閲覧や複写にあたっては困難の多いことを考えれば、なおさらであり、さまざまな立場におかれた研究者に石刻拓影利用の機会が開かれる意義は大きい。

以上のような問題については、森田の「史料の刊行から見た二十世紀末日本

の元朝史研究」（『アジア遊学』256　2021）を参照されたい。

最後ながら、日本での元朝石刻研究についての「総序」での評価について、ここに原文を引用させていただき、寄せられた関心に謝辞を付しておきたい。

> 在日本学者三十多年已着手調査未輯録或新出土元代金石碑刻遺存資料、多所日本大学和研究機構的研究人員相継対中国各地元代碑刻資料進行了細緻的調査・実地核対・拍照・拓録和整理工作、并運用到具体的元史研究中。

さて、話題を本巻に戻す。掲載された石刻は計156点、北京地区の元朝石刻については、私のこれまで知って来たもののほとんどが網羅され、さらに新知見が加わっている。ただし、あくまでも「ほとんど」で、他の文献に拓影や紹介がありながら、本書の対象とはなっていないものが、僧侶の塔額を中心に何点かある。

ちなみに、この地域の元朝石刻についての代表的な先行文献としては、すでに張国旺による本書の前言にも挙げられているように、次のようなものがあり、それらに掲載されている場合は、各石刻の解題に著録されている。先行文献リストとして有用でもあるので、以下に紹介する（前言での順による）。なお、本書の各石刻の解題においては、『日下旧聞考』などの、地志・典籍での記載についても言及する。

『新中国出土墓誌・北京』中国文物研究所・北京石刻芸術博物館編　文物出版社　2003

『北京市文物研究所蔵墓誌拓片』北京市文物研究所編　北京燕山出版社　2003

『北京文物精粋大系・石刻巻』呉夢麟編　北京出版社　2004

『北京元代史蹟図志』斉心編　北京燕山出版社　2009（以下、『図志』と略）

『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』北京図書館金石組編　中州古籍出版社　1990

『北京石刻芸術博物館蔵石刻拓片編目提要』北京石刻芸術博物館編　学苑出版社　2014

『新日下訪碑録』北京石刻芸術博物館編　北京燕山出版社　2013 －

『房山碑刻通志』楊亦武編　2018 －

※下の２つは録文のみで拓影なし

ただ、同じく近刊の基本的な資料集である、『北京遼金元拓片集』（北京遼金城垣博物館編　北京燕山出版社　2012）については、序文にあげられていないし、解題での言及もないように思う。

上の文献表でも拓影のない文献について注記したように、筆者の関心の対象はあくまでも拓影にある。たしかに、録文は過去の研究業績として、尊重、評価すべきものであるが、そこに施された点とともに、あくまでもその人が「読んだ」結果の産物で、いわば先行研究であって、資料として第一に参照すべきは、拓影でなければならない。各種の事情はあろうが、録文のみのものは、いわば一つの先行研究業績であり、資料としての価値は劣る、というのが森田の立場である。

なお、従前知られている文献中に見出される、北京地区所在の元朝時代の石刻については、拓影のないものを含めて、「北京地区現存元朝石刻目録稿補訂」（『13、14 世紀東アジア諸言語史料の総合的研究－元朝史料学の構築のために』、平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費基盤研究Ｂ研究成果報告書　2007）にまとめている。ただし、今となってはすでに古くなっていて、例えば『図志』などはまだ刊行されていないので、収録されていない。この目録についても絶えず改訂を加えているので、機会があれば再補訂版を公開したい。

まず、本書の各石刻の項目の構成について紹介しておく。

石刻は、年代順に並べられているが、年紀のないものについては、後ろにまとめられている。そして、各項目は、基本的には、解題、写真、拓影、録文よりなっており、録文には、原則として作成の典拠になった拓片の所蔵機関が書かれている。ただし、それが掲載されている拓影と同じかどうかが、書かれていない。なお、現況写真のないものもままある。

また、解題で取りあげられているのは、所在場所、材質、法量、行数字数、従前の著録（前掲の文献以外も含む）、石刻の記述内容、場合によっては出現の経緯、などである。

以下、いくつかの石刻について、筆者の気の付いた点を書いていく。

A　本書初見の石刻

まず取り上げたいのは、本書によってはじめてその「拓影」を見ることができた石刻である。ただし、すでに雑誌類に拓影が紹介されていながら、筆者の知見の及んでいないものもあるかもしれない。

一つは、北京城城壁の撤去に伴って発現された石刻類。これについては、これまでにもいろいろな文献でとりあげられてきたが、本書には、『図志』その他の既往の文献に記載されていないもの、あるいはそれらでは写真でしか見ることのできなかったものの拓影も含まれる。ちなみに、以下の新資料にも、城壁ではないが、やはり何らかの工事に伴って発現されたものが多い。余談ながら、城壁のうちでも石刻の出現している場所は限定されており、北京のどこかに積み上げられた城壁廃土から、新たな元代北京の石刻が見つかることはないだろうかというのは、筆者のかねてからの夢想である。

1　栗園碑

本書には、「014 大都大延洪寺栗園碑」が掲載されている。この石刻には、上部に虵年８月（至元 18/1281 ？）の直訳体聖旨、下部に至元 18 年４月の漢文聖旨と、２つの聖旨が刻されていて、その写真（全体、額）、拓影、録文を、本書で見ることができる。解題によれば、この石刻は、2007 年に房山区新街村の南北水調施工現場で出土したもので、現在は房山区文管所にあるとされている。内容は、大延洪寺（大都城内にあった）の財産、とくに栗園の保護を命じたものである。この石刻については、解題にも書かれているように、馬順平・張銘鑒「大都大延洪寺栗園碑釈証」（『故宮博物院刊』2011 － 1）があり、そこにも拓影は載せられている（簡体字録文は『北京考古史　元代』にもあり）。寺観の保護を命じた聖旨類などには、保護されるべき資産が列記されることが多いが、その種の石刻を集成した『元代白話碑集録』（1955）などに見えない、栗園についての資料として重要である。

ただし一方で、北京市豊台区の王佐郷瓦窯村からも、至大元年（1308）の「勅賜大慶寿寺栗園碑」が出土していることが、呉文・傅幸「五十年北京地区発現的重要文字石刻」（『北京文博』2000 － 1）や張寧「北京市第二次文物普査紀実」

(『首都博物館国慶四十周年文集』 1989) などに紹介されている。これもやはり寺院の財産としての栗園の保護についての石刻であろうが、同じく北京市内である豊台区で発現されたものなのに、こちらは本書に掲載されていないのは、なぜだろう。

２　進士その他の題名

北京の孔子廟には、明清歴次の科挙合格者の題名碑が並ぶことは有名である(簡単には森田『北京を見る読む集める』[大修館書店　2008] の「進士題名碑」参照)。問題は、元時代のそれで、一般には明代に表面が削られて転用されたとされている。ただし、残碑の存在が知られていて、孔子廟へ行けば見ることができる (現在では柵に囲われいて、かつてのように自由に近づくことはできなくなった)。

さて、本書には、次のような石刻が紹介されている。

110 至正十一年進士題名　これについては次に述べる。

127 至正二十六年国子中選生題名記 (首題) 『図志』225p に写真

以上２つの石刻は、欠落部分はあるものの、全体が残っている

148 進士題名残碑　無年月

149 元進士題名碑陰　無年月 (十三経碑林「万暦四年国子監題名」碑陰)

まず、「110 至正 11 年進士題名碑」について。

元の進士題名碑については、古くは銭大昕に『宋元科挙題名録』(『北京図書館古籍珍本叢書』21、王鳴韶鈔本影印) や『元進士考』(『嘉定銭大昕全集』[江蘇古籍出版社] 巻５、排印) があり、近年いくつか発表された元の登科録の復元研究の中でも、これらの石刻は利用されている。森田も、この石刻についてはかねて関心を有しており、かつて「元朝の科挙資料について 銭大昕の編著を中心に」(『東方学報』京都 73　2001、後『元代知識人と地域社会』[汲古書院 2004] に所収、于磊による中国語訳『元代士人与地方社会　従無法銷毀的石碑中找到被埋没的真相』[浙江大学出版社　2024] あり]、を書いた (以下旧稿Ａと略)。また、「北京国子監一方元代進士題名刻石初探」(『北京文博』2010 － 1) その他の邢鵬の一連の論文によって刺激され、『奈良史学』29 (2012) に、「北京国子

監所在の元科挙碑をめぐる札記　邢鵬氏の報告を中心に」という文章を書いたこともある（旧稿Ｂ）。

さて、孔子廟に現在立っている元の進士碑については、そもそも康熙年間に土中から出現したという記録があり、銭大昕も根拠は挙げていないものの、すでに「元石已亡、後人重刻故多誤字」と書いている。私も旧稿Ａにおいて、進士題名の部分に存在する欠落や本文中に散在する誤字について論じ、この碑が後世のもの、おそらくは出土した原碑にもとづく模刻と考えた。この碑について、邢鵬論文をふまえ、さらに若干の新資料を付け加えて書いたのが旧稿Ｂである。その経過や推定の根拠となる史料などは、これを参照していただきたい。簡単に書くと、

清朝の康熙年間に、当時国子祭酒であった呉苑が、不明になっていた明代の進士題名碑を探して、発掘？調査をした結果、明代の題名碑とともに、元の碑も掘り出した（大成殿裏の啓聖祠出土と言われる）。そして、それに基づいて再造したのが今立つ碑であろう。

というものである。

本書との関係でここで問題としたいのは、題名部分にある空白の処理である。ちなみに過去の研究では、銭大昕もこれらは元碑の欠落部分としているし（『宋元科挙題名録』）、羅振玉の『金石萃編未刻稿』（『石刻史料新編』１期５所収）や蕭啓慶の『元代進士考』（『国立中央研究院歴史語言研究所専刊』108　1992）も同じ処理をしている。一方、本書では、空白部分をつないで一つの人名にしている。これはいかがなものか。何か理由があるのだろうか。細かく書かないが、森田の本には問題箇所の部分拓影を載せているので、興味があれば見ていただきたい（174 頁）。

さらに、邢鵬の「北京国子監元代進士題名刻石調査研究」（『歴史文物』2007－５）の中にも、この碑が元代のオリジナルか、についての意見が述べられている。そこでは石の観察から、用いられている石が康熙のものであり、筆跡についても、同じ危素が書き手とされる、「鈔紙局碑」（後述）の拓本と対比して、これは別筆だとされる。本書の解題は邢氏の名を挙げているにもかかわらず、この点には言及されていない。銭大昕以来（僭越ながら筆者の書いたものも含め）問題となっていた点が、現場の研究者の観察によって、さらにはっきりとした。

ところで、邢鵬の文章にも疑問がなくはない。邢鵬は『菉竹堂碑目』という本を引いている。この本は、明の葉盛（1420 － 1474）という人の著書とされる。葉は正統 10 年（1445）の進士、有名な『水東日記』をはじめなど著書がたくさんあり、その１つに『菉竹堂書目』がある。一方、この「碑目」は、普通は、『粤雅堂叢書』本が用いられ（『石刻史料三編』所収、他にも鈔本もあるようだ）、たしかに、この本の巻５に「進士題名碑／王思誠記、危素書、王文麟篆、至正十一年二月／会試御試題名碑」（／は改行、点は筆者）という箇所がある。もし葉盛の著なら、康熙以前にこの石刻が知られていたことになる。ただ筆者の知る限り、この本は明の葉盛のものとは確認できない。

本書は、この碑の解題においては、清代からの文献の一部を挙げるにもかかわらず、銭大昕以下の先行研究にはふれず、したがって、これまでに紹介したような現在の石刻に対して、年代、文字に疑問があるという指摘があること、そもそも、碑の「出現」の経緯そのものに問題、あるいは再造の可能性があること、などについて言及していないというのは、執筆の姿勢として問題はないか。

なお、やはり孔子廟にある「127 至正二十六年国子中選生題名記」についても、本書には項目があるが、同じく記事の剥落という問題がある。基本的に同じ話なので、ここでは省略する。

ちなみに、先行研究、とくに日本での研究に言及しない傾向は、この碑に限らず、本書の解題のあちこちに見られる。自分の例を挙げて恐縮だが、なぜか「37 薊州平谷県大興隆禅寺創建経蔵記」（大徳元 /1297）の解題にだけ、私の名が見え、実は本書の全体でも日本人の名が見えるのは、この箇所のみなのである。これも奇妙な話だ。

話を科挙題名碑に戻して、新出資料と言えるのは、148、149 の２つである。

まず、148。これについては国家図書館の拓本が影印されているが、剥落が激しく読める箇所はわずかであり、進士とか科挙とかの語はないが、現存の場所、撰者が国子祭酒であることなどから、いずれかの年の進士題名碑であろうとは考えられる。

149 は、現在は国子監の十三経碑林にある「（万暦４年）国子監祭酒司業題名（首題）」という明代の石刻の碑陰に残されたもので、書かれている内容から考えて、邢鵬の言うように明代の流用時に削り残された元代の科挙の題名であろう。邢

論文には碑の写真や録文は掲載されているが、拓影が公開されるのは、おそらくは今回が初めてであろう。

なお、孔子廟関係の石刻としては、「090 大徳 11 年加封孔子詔碑」の碑陰に、後至元２年（1336）の「国子監等官題名」が刻されていることは、各種の文献に見えるのであるが、現在ではケースに納められていて、碑陰を現認できない。これの拓影も本書には収録されているが、初出ではないか。

３　刑部題名碑

本書で紹介されている新出資料で、もっとも注目すべきは、「124 刑部題名第三記」(至正 23/1363)であろう。３つの部分に分かれて出土しているこの石刻は、本書の解題には、「2004 年９月天安門東側観礼台後小夾道地下出土、現在北京石刻博物館」と書かれている。

この碑については、『北京石刻芸術博物館蔵石刻拓片編目提要』（北京石刻芸術博物館編　学苑出版社　2014）に解題が、また、劉衛東に「刑部題名第三記碑考」(『北京文博』2014 －３）がある。

内容を論ずるのは、筆者の能力では難しいので、後人の研究を待つが、ここで書いておきたいのは、残念なことには、文集所収のものなどを別にすれば、現在見ることのできる北京城内所在の官衙の題名石刻は、これと、後述する鈔紙局の題名だけであることである（あと北郊の順州のものが本書にも収録されているが)。しかも、後者もまた 1973 年に西城区新街口西明代城牆で発見されたもので(現所在地不明)、これも近年の出土である。この石刻が刑部の題名の「第三之記」であることなどから考えても、大都所在の各官衙には、それぞれの題名が、場合によっては複数、あったのであろう。それだけでもずいぶんな数の石刻が存在し、やがて姿を消したことが推測できる。おそらくは城壁の修築や種々の建設の石材として利用されたのではないか、あるいは、進士題名碑のところで述べたように、表面を削られて再利用されたのかもしれない。元王朝という多民族複合国家において、各官庁がどのような人々によって構成されていたかについて、同時代資料で知る機会は、おそらくは永久に失われたのである。

４　海雲碑

もう１つ、著名な碑でありながら、本書の拓本が初出ではないかと考えるものに、「005 大蒙古国燕京大慶寿寺西堂海雲大禅師碑記」（首題による、以下「海雲碑」）がある。この碑は、元朝初期の高僧で、宗教のみならず、政治・文化のさまざまな方面に関わりの深い海雲をたたえて、その生涯を記述した碑である。「乙卯九月望日」の日付を有し、憲宗５年（1255）のものと考えられている（異説あり）。この石刻は、西城区西長安街双塔寺で半ば土中に埋もれていた。天安門の前を東西に走り、現在も北京のメインストリートである長安街は、戦前の地図を見ていただければわかるように、双塔のところで湾曲していた。1943 年に日本軍による道の拡幅のために、塔が取り壊されたときに、石刻は塔内から掘り出された。その後の転変を経て、今は法源寺に立つ。この碑については、元朝史研究の泰斗陳垣の「北京雙塔寺海雲碑」（『人民日報』1961 年４月 23 日初出、以後いろいろな書物に所収）や、蘇天鈞「燕京双塔慶寿寺与海雲和尚」（『北京文物与考古』１　1983）などがあり、後者には録文も載せられているし、覚真の「《法源寺貞石録》元碑補録」（『北京文物与考古』６　2004）にも録文がある。また、『図志』や『精粋』も、写真や録文（『図志』は碑陽碑陰とも）を載せているし、現在碑が立っている法源寺の『法源寺貞石図録』（一誠編　五洲伝播出版社　2006）にもあり、この碑を取りあげた論文も多いが、なにせ亀趺も入れれば３メートルを超える巨碑で、しかも本文は碑陰にまで連続する長文であり、拓影が出版されたことはこれまでなかったのではないか。私自身、原地で碑文と蘇の録文とを対照させながら、必要箇所の録文を作成したこともある。本書の拓影は貴重な資料の提供と言えよう。

Ｂ　本書未収の石刻

逆に、すでに他の文献に拓影や写真などが見えるのに、本書に掲載されていないものであるが、おそらくもっとも重要なものとして、「鈔紙局中書戸部分官題名記」（首題）がある。至正 12 年（1352）９月立冬日のもので、1973 年西城区新街口西明代城牆発見（旧鼓楼大街豁口以東宝鈔胡同）と書く文献もあるが、現在地は不詳である。『図説北京史』（斉心編　北京燕山出版社　1999）には拓影があるし（下巻 247 頁）、前述のように、邢鵬の論文にも部分の拓影があるが、

そこには碑は首都博物館の所蔵とある。さらに、名前だけであれば、前掲劉衛東論文にも見える。

おそらくは、内容的に本書未掲載の石刻でもっとも重要なものの１つであり、なぜ掲載されていないのかはわからない。この石刻には名前のとおり、元代の紙幣「鈔」にかかわる官庁の由来とその関係者の名前が列記されており、この役所では、漢族、非漢族が混在していたことがわかり、元朝の中国支配についての重要資料たりうるからである。この石刻については、下記の文献もあるが、拓影はない。

喩震「記“鈔紙局中書戸部分官題名記”」『北京史論文集』（北京史研究会 1980）

高桂雲「元代紙鈔的歴史見証」『首都博物館叢刊』５　1990 （録文あり、題名部分は略）

Ｃ　護国寺所在の石刻をめぐって

最後に、かねて気になっている護国寺所在の石刻が、この本ではどう扱われているかについて、述べておきたい。上でも述べたように北京城内に元代の石刻が少ないなかで、例外的に西城区にある護国寺には集中的に残っていることについては、研究者の間ではよく知られている。しかし、この寺の建物で現在間違いなく残されているのは金剛殿のみであること、門の隙間から外郭を見た限りでは石刻の存在が確認できないことは、私もこれまでに書いてきた（『北京を見る読む集める』の「護国寺」の項参照）。また、『図志』では、金剛殿については、史蹟として項目が立てられ、現況の写真も載っているが、そこには「今僅存金剛殿、原有石碑多已無存」とあるし、また、『北京西城文物史跡第一輯』（北京燕山出版社　2011）にも、「上述諸石今在此処已不得見上」（255p）とある。その一方で、時代をさかのぼると、詳細な現地調査として、劉敦楨の「北平護国寺残蹟」（『中国営造学社彙刊』６－２　1935）があり、個々の建造物についての詳細な現地調査が述べられており、寺内で確認される元代の石刻６件についても、紹介されていて、写真も掲載されている。本書においても、同じ６件について、拓本や録文が載せられているのだが、次の箇条書きに注記したように、他の手段ではこれまでに見る機会の少なかったものが多い。ただし、本書の書

く各石刻の所在地については、書き方が不統一であり、疑問を生じる。まず、他の拓影掲載文献とともに、それを列記すると、次のとおり。石刻名（略記）、『集成』による所在地、他の掲載先の順に記した。「北拓」は『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』、「人文」は、「京都大学人文科学研究所中国拓本画像データベース」への所載を示し、「附録」は『図志』の附録所載の略。

018 至元 21 年聖旨碑　西城区護国寺　北拓、人文　附録

048 大崇国寺・・演公碑銘　西城区　北拓、人文　附録

054 舎利宝塔（横題）　西城区　北拓　附録

109 至正 11 年重新修建碑　西城区護国寺街　人文のみ

116 至正 14 聖旨碑　西城区護国寺街出土現存地不詳　人文のみ

125・・選公特賜澄慧国師伝戒碑　現存地不詳　北拓　附録

こうして見ると、本書における所在地表記は碑ごとに異なる。しかし、劉敦楨の報告では、同寺の舎利宝塔にある 054（舎利宝塔）を除いては、いずれも護国寺内の千寿殿の前にあると書かれていて、さまざまな表記のされている本書の所在地記述とは、ずれている。さらに、気になるのが『図志』での「附録」の表の存在である。上のリストには、附録への掲載についても、注記しておいたが、この「附録」全体では、39 件の石刻（42 件所載のうち、本文と重複２、表内での重複１）が挙げられており、それらの石刻はいずれも本書では項目として取りあげられている（当然拓影あり）。一方で、『図志』の凡例においては、「附録」について、次のように書かれている。

> 本書所収附録、為伊葆力先生所提供的有関文献中所記載的北京地区元代遺跡、但現在実物已無現存。

同書は「史蹟」の本であるから、現在の所在地で確認できないものは外したのであろうか。逆に言えば、「附録」に掲げられた石刻は現存しないのではないか。拓本以外には所在の確認できない護国寺石刻の現存については、筆者はかねて疑問を有しており、本書所収のうちの少なからざる石刻がすでに世界から姿を消し、拓影だけに形をとどめているのかもしれない。とすれば、新出石刻の紹介とともに、拓本のみで残された石刻の拓影の集成もまた現在では不可欠の仕事であり、それが本書の価値を大きくしていると言える。

その一方で、護国寺の各石刻の現在地についての記述から見て気になるのは、

本書編集段階での記述の整理が不統一であること、すなわち個々の石刻についての記述方式や内容について、この本が、記事に対する全体的な「まとめ」が行き届いてないのではないかと思わざるを得ないことである。

それにしても、もし、これらの石刻が北京のいずれかに保管されているのだとすれば、生きているうちにぜひ一見してみたい（門に施錠されたままであった金剛殿の内部もだが）。

最後に書いておきたい。

以上瑣末な話に終始したが、私が本書に期待したのは、本書の刊行で、元代北京の石刻については、この本１冊をよりどころにすればそれで済むこと、それによって元朝時代の北京やその周辺に関心を持つ人々が同じ土俵に立てることであった。しかし、これまで見てきたように、そうはいかなかった。はてさて、石刻拓影を見るというのもなかなか道が遠いものである。

さらに余談だが、首都博物館の館員である邢鵬のように、現地で実石を相手にした結果の考察は日本の我々にはほとんどの場合不可能事である。これからの石刻研究は、おそらくこうしたアプローチを有力な手段の一つとしていくだろう。現地の研究者でない我々が関われる範囲に限界が見えてきた。